

「ウホウホ」の解釈

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやま たくろう

子供のとき、タヌキの腹鼓のような感覚でゴリラの胸たたき(ドラミング)の真似をして遊んだ覚えがある。「ウホウホ」という、あれだ。実物は迫力があるそうだ。ただし、これは決して戦いの宣言などではないらしい。群れが出会ったときに胸たたきをして、一種の威嚇はするがそのまま別れるという。群れの出発を呼びかけるときなどにもなされるという。多くの人が抱く「好戦的」「リラ像」は誤解なのだ。

人間の動作でも誤解は起こる。どこかの国の人でも、例えば痛そうな様子などはわかる。だから、身振りなども自然的動作としてなんとなく通じるように思いがちだ。しかし、身振りに一種の「記号」性があることも多い。

ネパールのカトマンズに行ったときのこと。現地の方に写真のシャッターをお願いしたのだが、その方がカメラを持ちながら、頭を左右に数回かしげ

る(振る)動作をなさった。日本風に解釈すれば、「え?いいのかな?わからないなあ」みたいな動作だ。それで押すところをもう一度示して撮り直していたのだだったが、実はそれは「OK,大丈夫」という意味なのであった。ネパールでの頭をかしげる動作には「記号」性があり、日本人の私の解釈はまったく正反對なのであった。

自然的動作ならばそのまま解釈できるが、このように動作に「記号」性があれば、場合によっては解釈に失敗することもある。「解釈」は解釈する人の枠組みでなされるからだ。ゴリラの胸たたきも、怒りの自然的動作そのものではなく、そうした「記号」性があるといえるだろう。ゴリラ社会で「記号」性のある動きがあり、表示と解釈によるコミュニケーションが成立しているのなら、人類のコミュニケーションの始原を考える上で興味深い

(「記号」の定義は難しいが)。

もちろん、人間の言葉は「記号」の最たるものであり、そこに解釈がある。私たちはそうした解釈の共同体の中で生きている。一部でも解釈の枠組みが違つと、そこに「誤解」が生まれる。

学生時代、鬺鍋をしたとき、味をみた友人が「あまい」と言った。「何を入れた!?」——しかし食べてみると、シユウマイやら納豆やらの混じった変な味だったと記憶しているが、スイートではなかった。「あまい」は、その友人の方言で「塩味が薄い」という意味だったのである。そのえもいえぬ鍋を囲んでいるとき、今度は別の友人が、突如ゴリラの胸たたきのような、あの「ウホウホ」に似た動きを始めた。その自然的動作はただちに周囲に正確に解釈され、熱いものを食道に詰まらせた彼は水をもらって事なきを得た。そう、「解釈」は重要なのである。